

# 「五輪競技に」元日本王者挑む

# 弾め！ソフトテニス

「ソフトテニスを五輪競技に」。そんな夢に向かって、硬式テニスの陰に隠れがちな日本発祥のスポーツを、国内外で発信する元全国王者がいる。岐阜県多治見市出身の荻原雅斗さん(三三)。単身でカンボジアに渡り、競技の普及や代表チームの指導に携わってきた。今度は日本でも裾野を広げようと奮闘している。(片岡典子)

昨年十二月、名古屋市で開かれたソフトテニスの賞金大会「JAPAN GP2022」。荻原さんは主催会社の代表として会場に姿を見せ、サインや記念撮影に応じていた。取り囲んだのは、ソフトテニスの練習法などを発信する荻原さんの「YouTubeチャンネル」を見る子どもたちだ。

荻原さんは友人の誘いで小学四年の時に多治見市内のクラブチームに参加した。中学三年にカンボジアに渡った。高校卒業後、「選手としてはやりきった」と一度はコートを離れた。誰も自分を知らない土地で新しいことにゼロから挑戦したいと、友人から紹介を受けた日本食レストラン立ち上げの仕事に就くため二〇一三年にカンボジアに渡った。



観戦に訪れた子どもに求められ、サインに応じる荻原雅斗さん(右から二人目)。いずれも昨年12月、名古屋市中区のドルフィンアリーナで

**ソフトテニス** 硬式テニスが元になり、1884年に日本で生まれた。韓国、台湾など世界60の国と地域で競技され、日本ソフトテニス連盟に登録する指導者と選手は2021年度時点で計37万人余りで6割を中学生が占め、愛好者は約700万人に上る。実業団のトップ8チームによる日本リーグや、下部リーグなどが開催されている。荻原さんはソフトテニスの魅力を「バドミントンのようなスピード感と、卓球のようなボールの変化を見せられること」と語る。

## 普及へ大会主催 ■ 練習動画配信 ■ カンボジア代表指導

再びソフトテニスに関わるようになったのは、テニス経験のある日本人経営者に誘われ、カンボジアの地方の農村にボランティアでテニスコートを造ったのがきっかけだった。

活動がカンボジアのオリンピック委員会の目に留まり、選手への指導を頼まれた。最初は「運動不足の解消になれば」と軽い気持ちだった。だが、代表チームの活動が地元メディアに取り上げられ、国際大会に出るための支援を国から受けられるようになる。競技が認知されていくのを感じた。「同じようにやれば、他の国でも普及は難しくないのでは」。そう考えるようになった。

二〇年に高校の後輩、船水雄太選手(三三)の「プロ宣言」と同時に、二人で競技普及に向け、選手らのマネジメント会社「エースマネジメント」(仙台市)を設立。国内のトップ選手を招き、大阪で第一回の「JAPAN GP」を開いた。スポンサー企業を探したり大会グッズを販売したりして、ソフトテニスとしては異例の高額だという優勝賞金二百万円を集めた。

現在はカンボジアを拠点に日本と行き来する。現状でプロリーグなどがなく、トップ選手でも脚光を浴びることは少ないが、「五輪競技にすることで、日本や世界での普及や選手の世界向上につなげ、競技を続ける子どもたちを増やしたい」と意気込む。



躍動感あるプレーをする選手たち